CC-1　人工呼吸下の患者の夜間睡眠補助薬としてのプロポフォールの反復投与の効果

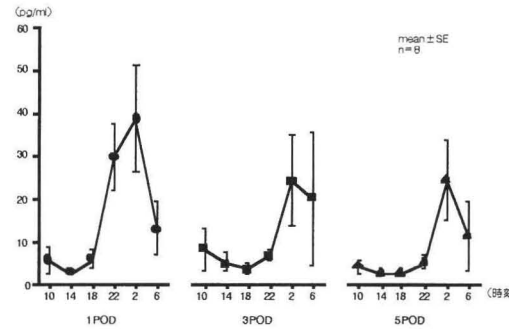
自治医科大学集中治療部

布宮　伸，丹野　英，窪田達也，村田克介，大竹一栄

【目的】人工呼吸療法患者の夜間睡眠補助薬としてのプロポフォール（P）の反復投与の効果の概日リズムの観点からの検討．

【方法】3日間以上の人工呼吸療法を受けた患者にPを夜間のみ持続投与した．P投与は0.5mg/kg/hrで開始し，Ramsay sedative score (SS)-4を目標に3.0mg/kg/hrを上限として調節した．PのみでSS-4に達しない場合はミダゾラム2.5mgを，また疼痛が原因と考えられる場合はブプレノルフィン0.1mgを，それぞれ単回投与を原則として追加した．投与開始後8時間以上の経過を確認後Pの投与を中止し，以後経時的にSSを判定した．さらに，5回以上のP投与を受けた患者のうち8例について，概日リズムの変化を血清メラトニン濃度を指標として検討した．

【結果】2000年1月までに26～87歳の58名（男37名，女21名；平均年齢63.9±13.2歳）の成人患者にのべ452回（平均7.8±5.6回；最長38回）の投与を行い，ほぼ満足すべき鎮静深度が得られた．452回のうち324回がPの投与中止後5分以内に，432回が15分以内にSS-2に達し，Pの反復投与に起因すると思われる覚醒遅延は認めなかった．一方，無効例が1症例，4回あったが，向精神薬大量服用による影響と考えられた．血清メラトニンは22時から上昇し，2時を最高値として6時まで分泌が続く日内変動リズムを繰り返し，生理的な覚醒/睡眠リズムなどの概日リズムは保たれていることが示唆された．現在まで，これら58名の患者に抑制を要するような不穏症状の発現は認めず，気管内チューブやカテーテル類の誤抜去も発生していない．



血清メラトニン濃度の変動

【総括】Pの夜間反復投与は覚醒遅延や覚醒時譫妄を起こさず安全に施行でき，患者の概日リズム確立による不穏症状発現予防に有用である．